

現代における漢文訓読の意義

古田島洋介*

本誌第五〇七号で三回にわたり、現行の漢文訓読の原理が原文を暗記するための記憶術であることを骨子として種々の問題を論じてきた。すでに御賛同いただいている方々はもちろんのこと、なんとなく眉唾物だと疑っている方々にも、漢文訓読のさまざまな現象を考えるさいに〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論がなかなか有効な仮説であることだけはお認めいただけるかと思う。本号では、まず補足として文選読みの問題を取り上げ、てから、いよいよ前号の拙論の末尾に記した宿題、すなわち現代における漢文訓読の意義について私見を述べることにする。

—

文選読みがいかなる現象であるかについては贅言を費やすまい。しばしば典型として挙げられる『詩経』冒頭の一首、すなわち周南「関雎」の第一〜四句「関関雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑」の文選読み

さえ見ておけば、おおよその実態は理解できるはずだ。ふつう当該四句は次のように訓読される。

関関たる雎鳩は、河の洲に在り。
窈窕たる淑女は、君子の好逑なり。

これを文選読みすれば――

関クワンクワンとヤハラギナケル雎鳩シヨウキウのミサゴは、河洲カシウのウキスに在り。
窈窕エウテウとユホビカナル淑女シユクテウのヨキムスメは、君子クンシのマレビトの好逑カウキウのヨキタグヒなり。⁽¹⁾

両者を比べてみれば、文選読みの何たるかは一目瞭然だろう。「関関」をまずは「クワンクワン」と音読みし、つなぎの助詞「と」を介して、「ヤハラギナケル」と訓を添えるわけだ。「窈窕」も同様で、音「エウテウ」が「と」を介して訓「ユホビカナル」に続いてゆく。「雎鳩」「河洲」「淑女」「君子」「好逑」も、名詞ゆえに音と訓を助詞「の」でつないでいるだけで、事の本質に変わりはない。いわゆる「音訓複読」の現象である。「複読」つまり二度読みという点では再読文字に似るが、再読文字が異なった訓による二度読み、いわば「訓訓複読」であるのに対し、文選読みはあくまで「音訓複読」を貫いてゆく。また、再読文字は一字であるが、文選読みは二字の語に用いられている。似て非なる現象であることは論を俟たない。

この文選読みという現象について、まず確認すべきは、これが決して翻訳ではないということである。中国語「関関」が日本語「ヤハラギナ

ク」と同義であるならば、のっけから「ヤハラギナケル」と記すのが翻訳というものだ。音読み「クワンクワン」をかぶせる必要はなからう。「窈窕」「雉鳩」「河洲」「淑女」「君子」「好逑」についても同様である。現に「在り」は訓読みのみだ。もちろん、音読みで十分わかるのである。つまり、外来語たる漢語が十全に消化され、日本語として定着しているのであれば、改めて訓読みを添える作業は不要であろう。実際「淑女」「君子」などは音読みだけでも十分に翻訳として通用するはずだ。之を要すれば、同じ語の音読みと訓読みを重ねるのは無駄もよいところで、日本語として不自然きわまりなく、とうてい翻訳とは呼びがたいということである。言うまでもなく、音読みと訓読みを重ねるとはいえ、重箱読み・湯桶読みなどは、まったく性質を異にする話だ。

同一の語を音と訓で重複して読む文選読みの不自然さは、つとに嘲笑の的になっていたようだ。例の「馬から落ちて落馬した」がそれである。高校生のとき、国語の授業中に、ある同級生が「あこがれというか、憧憬というか」と口にしたところ、すかさず教師が「何を言ってるんだ。同じことの繰り返しじゃないか!」と叱りつけ、次のような言い回しを教えてくださいましたの覚えている。

昔むかしにしえの武士まむらひの侍が、馬から落ちて落馬して、女の婦人に笑われた。

「昔」と「いにしえ」、「武士」と「侍」、「馬から落ちる」と「落馬」、「女」と「婦人」が重複している。この言い回しそのものの出処は知らない。「昔」と「いにしえ」がいずれも訓読みで、通常の文選読みとは異なるため、あるいはその国語の教師の創作かもしれない。ともあれ、

これが諺「馬から落ちて落馬する」に源を発していることはたしかである。『故事俗信 ことわざ大辞典』によれば、この諺は「漢文訓読の際に生じた二重でおかしな語法」であるという⁽³⁾。左に類例を挙げてみれば――

唐からの唐人が馬から落ちて落馬した。
山やまなか中山中馬やまなかウチウマから落ちて落馬した。

前者は「同じ意味のことばを重ねて、おもしろくいったもの」、後者は「ことばをむだに重ねていう言い方をあげていう」諺との由であるが、要するに、まともな日本語とは言えぬ文選読みをからかっているわけだ。雑俳にも次のような例が見えるという。

女馬士をんなばし馬から落ちてらく馬する
〔『柳多留』三五⁽⁵⁾〕

こうした言い回しは、現代日本語でも用例を作ることができる。いかな文選読み好きの奇特な教師でも、授業に遅刻した生徒が次のように不自然な日本語で言い訳をしたら、むっとせざるを得まい。

昨日のきのう、予のわれは懸命に命懸けで読書して書を読み、夜を徹して徹夜したため、睡魔のねむけに襲われて、業を授ける授業に遅刻して遅れました。

ところで、文選読みが日本語として不自然このうえなく、とても翻訳とは言えないとなると、「訓読とは翻訳なのである」⁽⁶⁾とする巷間の通念

にとつては、はなはだ不都合な事態となる。なぜなら、文選読みが訓法
 の一種であることに異論の余地がない以上、訓読が少なくとも部分的に
 は翻訳でないことを認めざるを得なくなってしまうからだ。私の見ると
 ころ、中田祝夫氏はこの事態に気づいていたのではないかと思われる。
 中田氏の執筆に係る『国語学大辞典』の「文選読み」項を読めば、その
 気配を感じ取ることができよう。当該項の解説は、さすがに訓点研究の
 第一人者たる氏の筆に成るだけあって、簡にして要を得た字句が連ねら
 れているが、文選読みを「漢文訓読における読み方の一種」として書き
 出した氏は、しだいに文選読みが実は翻訳とは呼び得ない事実に感づき、
 このままでは訓読が翻訳であるとの通念と矛盾を来たすのを懸念したた
 めか、末尾に至って、それまでの文脈とは打って変わった奇妙な一文を
 付け加えている。

欧文和訳の際に原語を逐次読み、かつ訳す場合よりも、全体が日本
 文としてありうる構造で読まれることは、一種の発明といふこと
 できよう。

内容が唐突であることはもちろん、「日本文としてありうる構造」
 「……といふこともできよう」などという歯切れの悪い言い回しが気
 なる。下司の勘ぐりかもしれないが、おそらく中田氏は、文選読みを訓
 法の一つと認めている以上、あまりに日本語として不自然なため、訓読
 は翻訳なりとの通説が部分的にせよ崩れてしまうのに気づいたのであ
 る。そこで、欧文に文選読みを用いた場合と比較すれば、漢文における
 文選読みは、まだしも翻訳と呼べるはずだと言いたかったのではないか。
 たしかに、たとえば英文の文選読みでは、漢文の文選読みよりも、さ

らに日本語としての不自然さが増すだろう。事実、〈Yesterday I saw
 a pretty girl on the street.〉に文選読みを試みると――

Yesterday のきのう、I の我は a の或る pretty と美しき girl の
 乙女を the の例の street の路の on の上にて saw と見かけたり。

もっとも、冠詞や前置詞などの虚辞まで文選読みするから極端におか
 しくなるわけで、漢文の文選読みに近づけるべく、名詞・動詞・形容詞
 などの実辞にのみ文選読みを適用すれば、かなり不自然さが解消される。
 実際に試みると――

Yesterday のきのう、I の我は或る pretty と美しき girl の乙女を
 例の street の路の上にて saw と見かけたり。

私の感覚では漢文の文選読みの場合と五十歩百歩という印象だが、果
 たしてどうだろうか。すでに日本人になじみの深い英単語ばかりだから
 そう感じるだけかもしれない。要するに、英文の文選読みにせよ、漢文
 の文選読みにせよ、慣れ親しんだ単語が多ければ不自然さが減じ、晦渋
 な単語が多ければ不自然さが増すだけのことではないか。欧文と漢文の
 文選読みを一概に比較して論ずるのは、興味深い話題ではあるが、どれ
 ほど意味のある比較かは疑問である。確実なのは、いづれもまともな日
 本語ではないということだ。中田氏がいかに弁護を試みよう、文選読
 みが翻訳として成立しないことは明らかであろう。

二

では、文選読みをどのような現象として捉えればよいのだろうか。ここで例のごとく登場するのが〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論である。文選読みは、原文たる漢文を記憶するための一法として発達したものだと考えれば、事の本質は見やすいのである。

まず、原理としては、文選読みを音と訓による文字情報の絞り込み検索にたとえることができよう。今日、コンピュータで情報検索を行なうさい、一つのキーワードで大量の情報ヒットした場合、もう一つの別のキーワードを加えてAND検索を実施すれば、情報件数を絞り込むことができる。あの作業と似たようなものだ。たとえば、「セイ」という音だけを手がかりに、ある漢字を想起起こそうとしても、多数の文字が脳裏に浮かんでしまい、特定の漢字に絞り込むことは不可能であろう。ところが、そこに「あお」という訓をも条件として加えれば、たちどころに「青」字が念頭に浮かぶ。逆も亦た真なり。訓「あお」だけでは、「青」か「蒼」か、はたまた「碧」か、一つの漢字を特定するには至らない。けれども、音「セイ」が条件として付け加われば、これまたすぐに「青」字だとわかる。こうした音と訓という二つの条件による原文の文字の確定こそが文選読みの原理なのだ。やはり、文選読みも〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論の一角に位置づけて理解することが可能であり、そう考えてこそ、古人がわざわざ無駄にして不自然としか思えない音訓複読を試みた真意がわかろうというものだ。

もっとも、これに対して、ただちに反論が起きるだろう。先の『詩経』周南「閔雎」を例とすれば、四つの訓「ミサゴ」「ウキス」「ヨキム

スメ」「ヨキタグヒ」はそれぞれ原文「雎鳩」「河洲」「淑女」「好逑」を復元するのに大なり小なり役立つとしても、三つの訓「ヤハラギナク」「ユホビカナリ」「マレビト」が「閔閔」「窈窕」「君子」の復元にどれだけ有効か、大いに疑問だからである。つまり、「ヤハラギナク」と聞いても、「クワンクワン」と発音される漢語のなかから別して「閔閔」の二字が念頭に浮かぶ保証はどこにもなく、同じく「ユホビカナリ」を手がかりとして、「エウテウ」と発音される漢語のうち、「窈窕」の二字を確実に選び取れるかどうかは、はなはだ心もとない。「クンシ」と発音すれば、すでに「君子」であることは明らかで、「マレビト」では、いかなる漢語に相当するのか、見当がつかかぬだろう。実際、往時の訓読資料に見られる文選読みの訓は、とうてい原文復元のための情報として添えられたとは思われず、語釈としか言いようのないものが大半を占める。「豺狼」Ⅱ「サイラウのオホカミ」、「周流」Ⅱ「シウリウとメグル」などであれば、訓「オホカミ」「メグル」が原文の復元に寄与するが、「浩汗」Ⅱ「カウカンとオギロナリ」、「野干」Ⅱ「ヤカンのコギツネ」では、訓が原文の文字と直接には結びつかない。もちろん、こうした訓が原文の復元についてまったく役立たずだと言うつもりはない。「カウカン」または「ヤカン」と発音される漢語のなかから、「オギロナリ」または「コギツネ」を意味する語を探すとすれば、単に音読みだけを与えられた場合よりも、はるかに絞込みの可能性が高くなる。けれども、それはあくまで間接的な手段であり、直接的に原文の文字を復元する手段ではない。もし文選読みが当初から原文復元のための記憶術として成立したのであれば、このような意味を介した迂遠な方式を採らず、もっと字面の復元に有利な端的な方式が講じられたはずである。やはり、文選読みは語釈として出発したとしか思えない。たまたま原文の復元に

結びつく訓が添えられていることがあるにしても。

では、どう考えればよいのだろうか。ここで思い起こすべきは、文選読みの歴史的な変遷である。当初、文選読みが難解な語の釈義を添える一種の解釈法として編み出されたことは否めない。ところが、平安時代末期から中世にかけて、次のような型の文選読みが出現してくる。

東風 トウフウのヒガシノカゼフイテ

凍融 トウユウとコヲリトク

紅虹 コウコウのクレナキノニジ

空靄 クウシウとソラニシグルル

妙絶 メウゼツとタヘニスグレタルナリ⁽⁹⁾

このような文選読みが、先に論じたような語釈を添える型と異なることは明らかだ。先の場合には、二字から成る「関関」「窈窕」「君子」それぞれ全体に一つの訓を当てていたのに対し、右に掲げた型の文選読みは、二字に対して逐字に訓を当てている。つまり、「東風」を例とすれば、従来の型なら「トウフウのコチフク」(コチ＝東風)とでも読むべきところを、一字づつ訓を当てて「ヒガシノカゼフク」と読んでいたのだ。こうした新しい型の文選読みが原文の復元に有利なことは言を俟たないであろう。冒頭に掲げた『詩経』周南「関雎」の文選読みのうち、特に「ヨキヲトメ」「ヨキタグヒ」が原文「淑女」「好逑」の復元に役立つのは、このような逐字訓になっているからだ。「ミサゴ」「ウキス」も、それぞれ「雎」「洲」の復元には役立つだろう。すなわち、文選読みに用いられる訓は、当初は語釈として成立したものの、しだいに原文の復元に有利な方向へ、つまり、記憶術としての色彩を濃くしていったと考え

られるのである。先に「文選読みは、原文たる漢文を記憶するための一法として発達した」と記したのは、この意味である。

平安時代、文選読みは、ある種の文献にばらばらと登場するだけだった。難解な語についてだけ用いられる語釈なのだから、それも当然のことだろう。けれども、時が流れて江戸時代になると、全篇を文選読みで貫いた文献が現れる。これについて、中田氏は「この(文選読みという)訓読法が形式化し、多くの語句に及ぼさなければ済まなくなった」⁽¹⁰⁾からだろうと推定するが、そればかりが理由ではあるまい。江戸時代になって、訓読が原文の記憶術として明確に意識されるようになったからこそ、一つの文献をすべて文選読みで一貫する訓法が試みられたのであるまいか。本誌第五号の拙稿で、当初は解釈であった訓読が平安時代中期ごろからしだいに記憶術としての性格を強めはじめ、江戸時代には記憶術として定着したという訓読史の見通しを述べた。私見によれば、文選読みも、この流れに沿って変遷を示したのである。いかに日本語として不自然であっても、音訓複読によって容易に原文の字句を絞り込める文選読みは、記憶術としてなかなか便利だったのだ。

江戸時代、太宰春台と日尾荆山が文選読みに対して対照的な見解を述べている。太宰春台は文選読みを無益な訓法として非難し、日尾荆山は優雅な訓法として賞賛した。

此法(文選読み)何れの時より始まるといふことを知らず。尤無益の事なり。是を止て、只常の如く読むべし。——太宰春台

(文選読みは)甚益ある事也。…誠に雅馴にして、朗誦するに堪たり。…最も深く深切なる碩学たちの後進を恵みたまへる御心より

なれる也。⁽¹³⁾ ——日尾荆山

しかし、右のような見解の相違こそあれ、二人がともに前提としていたのは、原文の記憶なのである。太宰春台は音読みこそ記憶に便利であると、日尾荆山は訓読みでも記憶できるとの考えであった。

吾が国には、言語の数少くして、一つの倭訓を数字に通用する故に、倭訓に読みては、其の字を記憶せず。記憶すれども、誤多し。音にて読めば、直ちにその字を記憶す。……倭語は煩瑣にして、記憶するに勞あり。音に読めば、簡約にして誦を成しやすし。⁽¹⁴⁾ ——太宰春台

和訓に読て、其字を記憶せぬ位な人は、固より陋学膚見の人にして、文章作りたればとて、観るに足らぬは勿論のこと也。意熟し目熟すれば、音に読訓に読の差別にはよらず、自然と記憶する者なり。⁽¹⁵⁾

——日尾荆山

ただし、ここで避けて通れない問題がある。それは、なぜ文選読みが廃れてしまったのかという問題だ。今日、文選読みを用いて訓読した漢文書籍は一冊も見かけない。音訓複読によって原文を有利に記憶できるはずの文選読みが、すでに江戸時代末期にはほとんど廃絶の憂き目に遭い、明治時代以後の訓読ではまったく用いられなくなってしまった⁽¹⁶⁾のは、いかなる理由によるのだろうか。江戸時代はもろんのこと、明治以降、現行の訓読に至るまで、記憶術としての原理が通底しているならば、文選読みがこうもやすやすと廃止されるとは思えないのに、である。

しかし、この問題の答は意外に簡単なのではないだろうか。それは、文選読みが記憶術として有利な点を備えている反面、重大な欠陥をも抱えていたからにはほかならない。訓読が記憶術として威力を発揮するのは、〈訓読文の暗誦→原文の再生〉という二重の過程においてである。第二段階すなわち〈原文の再生〉について、文選読みが多大な効力を発揮することは間違いないだろう。なんといっても、音または訓のいずれか一方よりは、音・訓の両者がそろっているほうが、原文の字句を復原するには有利に違いない。だが、第一段階すなわち〈訓読文の暗誦〉となると、話が大きく異なってくる。文選読みでは、訓読文が長すぎて暗記しづらいのだ。一語に音と訓の両者を当てて読めば、勢い訓読文が冗漫になって記憶の負担が増し、記憶術の要件たる簡潔性に反するわけである。これが最大の理由だろう。しかも、先に論じたように、音訓を重複させる文選読みには、日本語として不自然な点が目立ち、ふつうの訓読文よりも記憶しにくい。だれしも、不自然な日本語よりは、自然な日本語のほうが暗誦しやすいはずだ。いくら日尾荆山が「誠に雅馴にして、朗誦するに堪たり」と言おうと、これは読み添えの訓にのみ当てはまる評言で、音と訓が重なれば、どうしても不自然さは避けられない。さらには、印刷上の煩雑さをも指摘してよいかもしれない。文選読みを印刷するとなれば、原文の右に音を、左に訓を入れることになるが、この作業そのものが煩雑をきわめるうえ、当然の結果として、前行の左傍の訓と次行の右傍の音が衝突する恐れが出てくるし、送り仮名や返り点とも見分けがつかなくなる可能性が生じ、たとえなんとか印刷できても、読みづらくことは否めまい。これでは、歓迎されないのも已むを得ぬところである。

右を要するに、文選読みを実行するとなれば、訓読文が冗長で不自然

な日本語のため、記憶に過重な負担がかかり、印刷にも少なからぬ不便が付きまとうことになる。いかに原文の復原に有利とはいえ、江戸時代末期以後、文選読みが姿を消したのも宜なるかなだ。日尾荆山は草葉の蔭で悔し涙を流しているかもしれないが。

以上、文選読みという現象およびその変遷について、〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論の立場から些少の考察を試みた。ここでも当該仮説がなかなか有効に機能するかと思う。

三

さて、いよいよ〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論最大の敵に立ち向かわねばならない。それは、すでに暗記が学習の目的でないことはおろか、学習の手段ですらなくなった現今の情勢において、いったい記憶術としての漢文訓読が何の役に立つのかという問題である。単に訓読を記憶術として認識するだけでは、たとえそれが正しい認識だとしても、記憶術として用いる場がなくなってしまう以上、ただちに無用の長物として排斥されかねない。実際、さる学会の席上で〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論の骨子を発表したさいも、ある先達の方から「説得力があることは認める。でも、もし本当に記憶術だとしたら、漢文訓読はますます減じるしかないと思っただね」との感想を聞かされた。⁽¹⁷⁾〈漢文訓読Ⅱ記憶術〉論は、ついに〈漢文訓読Ⅱ無用〉論にすぎないのだろうか。少なくとも見積もっても推古朝以来一千数百年、日本人が孜孜として育んできた漢文訓読は、もはや歴史的使命を終えてしまったのだろうか。

次のような記録を読めば、たしかに隔世の感を否めない。

倫敦の寓にて予が居たる室の真下は、中村敬宇先生の室なり。毎朝五時頃より、先生が八家文・『左伝』・『史記』等を朗読するを聞く。先生が日本より携帯したる漢籍は少かりし様子なるに、何処にて此等の書籍を手に入れて読むにやと怪しみて、一日之を先生に問いたるに、読書には非ずして暗誦したるなり。其気根の強きこと、敬服に堪えざりき。⁽¹⁸⁾

言うまでもなく、中村敬宇は、中村正直のこと。翻訳『西国立志編』や『自由之理』は、このような漢文の素養に裏打ちされていたのである。しかし、記憶術たる漢文訓読にとって必須の作業である此の如き音読の習慣は、すでに廃れてしまった。永井荷風が随筆「深川の唄」（明治四十二年）で、東京の市電の車内風景を描きつつ、「誰れかゞ報知新聞の雑報を音読し初めた」と記したところを見ると、どうやら明治の末ごろまで音読の習慣が残っていたのはたしかである。いや、場所によっては、かなり最近まで音読の習慣が保たれていたらしい。というのも、平成八年（一九九六年）十二月七日、福沢諭吉協会の招聘にあづかり、銀座の交詢社におもむいて講演に及んだとき、司会の服部禮次郎氏から「つい数年前まで、ここ交詢社の図書室には〈音読禁止〉の看板が立っていた」とお教えいただいたからである。おそらく、年輩の方々が図書室で新聞やら書籍やらを音読なさっていたのだろう。その方々が音読の習慣を身につけていたとなれば、昭和初期にも、音読を重視した教育が行なわれていたかと想像する。

もっとも、過去はあくまで過去にすぎず、現今、音読はまったく軽視されるようになり、ましてや音読を通じての暗記となると、ほとんど消滅したに近いのが実情だろう。高校一年生になった私の娘の勉強ぶりを

見ていても、音読して暗記するのは例の『土左日記』『枕草子』『徒然草』の冒頭や『万葉集』の有名な歌のみで、たまた英語の例文を暗誦する程度。漢文の訓読文を暗誦することは一度もないし、ましてやその訓読文によって原文を復原するなど考えられない。毎年六月、ここ明星大学の学生が教育実習に向くたびに、その研究授業を参観していくが、中学生や高校生に繰り返し音読させる場面は目にしたことがない。嗚呼、音読の伝統は姿を消してしまったのだ。これでは、いかに訓読が記憶術としての威力を備えていたとしても、もはや宝の持ち腐れというものだろう。

ただし、現代においても、訓読を記憶術として用いた経験のある人物がいないことはない。その人物とは、ほかでもない、かく言うこの私である。十数年前、台湾大学で学んでいたときのこと。「李商隱詩專題討論」という授業があった。担当は、師範大学から御出講くださった汪中教授である。まもなく学年末の試験というとき、血の気がひくような情報が耳に入った。それは〈例年、李商隱の詩について、かなり大きな構えの問題が出される。李商隱の詩を能うるかぎり暗記し、答案に引用する詩の数が多ければ多いほど得点が高くなる〉という情報だった。試験まで三週間。私はただちに暗記にとりかかったが、御承知のとおり、李商隱の詩は難解なものが多い。たとえ中国語で暗記しても、数日すると、すぐにいくつかの字があやふやになり、果たして何を詠じている詩なのか、心もとなくなる。そこで一計を案じて取り組んだのが、訓読文の暗記であった。中国語で暗記すると同時に訓読文も覚えるのであるから、いささか負担が重いが、中国語の発音では記憶が薄れた字句も、訓読文さえ思い出せば、なんとか原文を脳裏に再生できるのである。なにしろ、訓読できれば、おおよその意味は見当がつくのだから、なかなか

か強い味方だ。もっとも、そんな調子ゆえ、三週間で暗記できたのは、わずかに二十首。大学院でともに学んでいたある台湾人の女子学生など、試験の当日、「百首が目標だったのに、九十首しか覚えられなかった」と嘆いていたほどだ。結果は予想がつくだろう。私の得点は七十二点。大学院生の合格基準点は七十点であるから、やっと合格したにすぎない。しかも、今や私も教壇に立つ身となれば、七十二点がどのような点数かは容易に想像できる。たぶん、実際は不合格だったのだろう。温情で合格させてくれたとしか思えない。おそらく、汪中教授はお迷いになったあげく、基準点の七十点で合格ではいかにもわざわざとらしいので、もっともらしく二点を加えてくださったのだ。しかし、結果ははかばかしくなかったとはいえ、私が訓読を原詩の暗記に利用したのは、掛け値なしの事実である。そのときは合格点ももらって喜んでいただけで、訓読が実は記憶術として発達してきたものとは、つゆ考えてもみなかったが。

むろん、このような体験を通じて訓読が記憶術として役立つことを知っているのは、多少とも本腰を入れて古典中国語すなわち漢文を勉強する必要に迫られた者だけであり、それを一般論として主張するつもりは毫もない。少なくとも現行の教育風潮のなかでは、暗誦は不要とされ、訓読は記憶術として活用される場を失ってしまっているのである。

四

では、どこに訓読の生きる場を見出だすか。世間で音読重視の声が高まり、漢文教育の重要性が再認識されれば、訓読は容易にその地歩を回復することができる。しかし、当面は、いずれも望み薄のようだ。とすれば、訓読は、さしあたりの存在意義を主張して生き残りを図り、いつ

の日に重要性を再認知されるまで、隠忍自重の歳月を送らざるを得まい。以下、訓読が暫く記憶術としての価値を失ってはいるとしても、なおかつ保ち続けている存在意義について、私見を述べることとする。

第一は、漢文すなわち古典中国語の解釈手段としての有効性である。「訓読は記憶術だ。翻訳ではない」と言いながら、解釈としての有効性を言い立てるのは矛盾して聞こえるかもしれないが、実はさにあらず。私は「訓読を翻訳と規定すると、どうしても説明できない部分や説明に無理のくる部分が残る。したがって、記憶術と規定するほうが合理的だ」と主張しているのであり、解釈・翻訳として役に立たないとは言っていない。それどころか、現に別稿で示したごとく、『論語』のある一節を例とすれば、訓読の解釈・翻訳としての有効率は九二・五%に達する⁽²⁰⁾。経験のうえでも、多少なりとも訓読の世話になったことがあれば、その解釈・翻訳としての有効性は自明の理だろう。理論上は記憶術だと規定しておくのが合理的だとしても、実用上は解釈手段だと考えておいて、さほど支障を来たさないのである。事実、一般には、だれもが訓読を通じて古典中国語を解釈してきたし、また、現在でも訓読文を頼って理解しているではないか。

もちろん、一〇〇%ではなく、九二・五%では、不安を拭いきれまい。「さほど支障を来たさない」というような言い方に胡散臭さを感じる向きもあろう。たとえ〇・一%といえども有効性が疑われるならば、理論的には欠陥品である。けれども、よくよく考えてみれば、漢文には紀元前数百年に成った書物さえ数多く含まれているのだ。いわゆる四書五経や諸子百家の書は、すべて紀元前の書物である。このような外国の古典をほぼ九割の有効率で解釈し得るとなれば、すぐれた手段として珍重・保存するのが当然であろう。ヨーロッパについて考えてみればよい。プ

ラトンが書き残したソクラテスの言辭を原文で理解するために、我々はどれほどの努力を要することか。難解きわまる古典ギリシア語と格闘のすえ誤読・誤訳の山を築き、結局は翻訳で読むしかないとあきらめるのが一般ではないか。これと比較するとき、多少は不明確な点を残しつつも、弟子たちが師たる孔子の言行を記録した『論語』を原文のまま訓読を添えて読める幸せに想いを致さざるを得ないのである。

しばしば「中国人は日本の訓読を学んで、始めて自分たちの古典詩文の正確な意味を知る」と言われるのも、やはり訓読の解釈法としての優秀さを示しているよう。原田種成氏も、ある中国人の大学院生が訓読の解釈手段としての有効性に感心し、「自分たちは古典を中国音で音読することができる。しかし、往々にして自ら欺くことがあり、助詞などいじ加減に飛ばして読むことがある。しかし日本式の訓読では、「欲」「将」「当」「謂」などの字が、どこまで管到して(かかって)いるか、どの字から返って読むか、一字もいいかげんにできず正確に読まなければならぬ」と言った話を伝えている⁽²¹⁾。私も友人の中国人から、「日本人の訓読を参考にした結果、小さいころからずっと思い込んでいた『論語』の一節の意味が、実は誤解だとわかった」などという類の話を少なからず耳にする。訓読が解釈手段として有効なことは否定できまい。

ただし、日本人とて、日本の古典をきちんと理解できるものではなく、英訳を読んで始めて正確な意味を知るという場合も少なくない。だれしも母国語で書かれた古典は、ついわかったような気になってしまうもので、特に専門的に勉強した経験がなければ正確には理解していないことも多く、外国語訳を通じて理解を新たにするのは人のよく経験するところである。したがって、中国人が訓読の有効性を認めたからといって、手放して喜んでよいかどうか、多少の譲歩が必要だろう。

けれども、よしんば訓読に対する中国人の賞賛を話半分に受け取るとしても、訓読の文法分析能力についてだけは疑いを差しさむ余地があるまい。返り点とは古典中国語の構造を日本語の構造に変換するための符号なのだから、返り点を見れば原文の文法構造のあらましがわかるのである。なぜ動詞の下の二字を先に読んでから、一二点によって上の動詞に返るのかと言えば、それは動詞の下に二字の目的語が着いているからだ。要するに、その種の一二点は、動詞と目的語との切れ目を示しているのである。また、漢字は、その性質上、品詞が不明確な憾みがあるが、送り仮名を付けて読めば、品詞もおおむね明らかになる。「之」に、送り仮名がなければふつうは助詞「の」、送り仮名「く」が付けてあれば動詞「ゆく」という具合だ。むろん、時として多少の無理が生ずるのはしかたない。たとえば、古典中国語としては助動詞としか思えない「得」を、動詞のごとく「……することを得たり」と読んだりもする。しかし、そのような品詞のずれが生じるのも、全体から見ればきわめて低い比率にとどまることは、我々が経験を通じて知るところであろう。何かと不便がつきまとうとはいえ、諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店）が今日でも揺るぎない価値を有しているのは、採録された漢字・語彙の豊富さもさることながら、用例に返り点が付いているからではないのか。返り点・送り仮名の両者を備えた『広漢和辞典』（大修館書店）が至便の辞典であることは、改めて言うまでもなからう。

日本人が多少とも漢文と付き合わざるを得ないかぎり、その解釈としての有効性、その文法分析能力については、異論の余地があるまいと思われる。

五

第二は、漢文訓読が生んだ訓読表現の重要性である。訓読に用いられる言い回しが一般の日本語のなかに持ち込まれ、一定の表現として成立している場合が少なくない。このような表現すなわち訓読表現が日本語のなかで果たしてきた役割は決して無視できないだろう。ふつう、漢文訓読と日本語の関係となると、ただちに漢語や故事成語に目が注がれる。それは決して誤りではなく、今なお日本人が大量の漢語を使用し、時に故事成語を用いることを想えば、誤りどころか、いくら強調しても強調しすぎることなき重要な事実である。けれども、一面、漢文訓読と漢語・故事成語との関連はあまりに見やすい事実であるだけに、今さら言挙げしても、かえって陳腐に響き、どれほどの説得力を持つか疑問である。そもそも、この事実が事の重要性に見合うだけの説得力を以て迎えられるのであれば、漢文訓読が現今のごとき窮状に陥ることはなかったはずだ。今日、日本語のなかに英語の語彙を盛んに片仮名で取り入れる一方で、英語の学習に本腰を入れる日本人がさして増えもしないという現状を見るにつけ、どうやら借用語彙に対する認識を深めよと叫んでも、さしたる効果は望めないような気がする。英語においてすら且つ此の如し、況んや漢文においてをや、というわけだ。そこで、ここでは敢えて少し目先を変え、訓読表現の重要性を前面に押し出してみたいと考えるのである。

訓読表現は、現代日本語にも数多く残っている。「不得已」を訓読した「已むを得ず」、「不得不V」の訓読「しせざるを得ず」が口語体になった「しせざるを得ない」などが手近な例であろう。「なかんづく」も、

「就中」の訓読「中に就く」が音便化したものだ。いや、こうした堅苦しい表現ばかりではない。たとえば、現在でも我々はさしたる生硬さを感ずることなく、「駅で待つこと二十分、やっと友だちがやってきた」だの「独走すること三キロ、あと一息でゴールが見える地点にさしかかった」だのと書いたりするだろう。私見によれば、この「駅で待つこと二十分」「独走すること三キロ」は、訓読表現に由来する言い回しかと思われる。つまり「V+時間/距離」の訓法「〜すること…」が、一つの型として日本語に応用された例なのだろう。「居三年」の訓読「居ること三年」や「行三十里」の訓読「行くこと三十里」などが、その根底に存在するのである。

少しく時をさかのぼり、明治時代に綴られたいわゆる漢文訓読体の文章となれば、全篇是れ訓読表現と言っても誇張ではあるまい。単に文語体と称すべき文章にも訓読表現が頻出する。こうした訓読表現は、漢文訓読に慣れ親しんでいた当時の人々であれば、まずは誤解することなく読めたのであろう。しかし、漢文訓読に習熟せざる現代の我々は、意味や語感を誤って理解する危険性が高い。この問題については、すでに拙文を物したことがあるので、ここで詳しく述べるつもりはないが、一つだけ例を示しておこう。

すべて西洋の食事は、水漿を省き、中にも昼食は甚簡易なる風俗なり。特に小学校の童生のみならず、大人も一般かくの如し。²³⁾

「甚」「かくの如し」がいかに漢文訓読調だが、容易に理解できる語句ゆえ、取り立てて騒ぐほどのこともない。「水漿」が飲み物の意だとわかりさえすれば、別して取り上げる問題などなさそうに見える一節だ

ろう。けれども、警戒すべきは、一見それこそ特に問題とも思えぬ「特に」なのだ。断言してもよい、現在の大学生は十人中十人までが、これを「とくに」と読み、なんとなく変な感じだと思いつつ見過ごしてしまおうだろう。だが、少しでも漢文訓読を学んでいれば、これを「ただに」と読むことは容易である。例の累加形「不特く亦…」すなわち「特に」のみならず、亦た…」が多少の変型をこうむって用いられているだけだ。このような訓読表現を正確に読むためには、漢文訓読の知識が欠かせないのである。漢語や故事成語と異なり、漢字が露骨にずらずら並んでいるわけではないので、つい注意を怠りがちになる。これが訓読表現の陥穽だ。

ここで、さらに、訓読表現が英語の翻訳にも用いられていることを確認しておこう。英和辞典をばらりとめくり、なじみ深い単語や熟語を引くだけでも、いかに我々が漢文訓読を頼りに英語を訳しているかがわかる。〈also/too〉を「〜もまた」と訳すのは、「亦」字を念頭に置いているからにほかなるまい。〈be about to do〉の訳「まさに〜しようとしている」は、再読文字「将」の訓読「まさに〜せんとす」を口語体に改めただけ。関係代名詞〈which/who〉などを「〜するところの」などと訳すのは、漢文に頻出する「所」を用いているからだ。漢文の「所」の用法がわかっていればこそ、場所でもないのに「ところ」という語を用いる理由が納得できるのである。〈not necessarily〉を「必ずしも〜しない」と訳すのも、これが漢文の「不必く」(必ずしも〜せず)に相当する表現だと知っているからに違いない。最近でこそ〈not only… but also…〉は「〜だけでなく…もまた」「〜ばかりでなく…も」などと訳されているが、その根底に漢文「不唯く亦…」の訓読「唯だに…のみならず、亦た…」が透けて見えるように感じるのは、私だけではないだ

ろう。言うまでもなく、右に「特に」との関連で登場した「不特く亦…」（特にのみならず、亦た…）も、これと同類だ。むしろ、〈Every-one knows it.〉を必ず「三尺の童子すら之を知る」と訳せなどと言っているわけではない。けれども、古人のそのような訳文を目にしたとき、それを十分に理解できるだけの知識は備えていたほうがよいのではないか。いや、いざとなればそのように訳せる可能性をも己れのものとしておくほうが、言語生活としてはるかに豊かだと言えるのではなからうか。明治時代の文章にしばしば現れる訓読表現についてはもちろんのこと、現代日本語についても、英語の翻訳においても、漢文訓読に関する知識は決して無駄でないのである。

六

第三は、現代中国語の学習との関連における漢文訓読の重要性である。ただし、それを説くに先立ち、いささか字句を費やしておかねばなるまい。なぜなら、前回の拙稿にも記したとおり、現今、古典中国語たる漢文も現代中国語で読むのが当然だとの風潮がますます高まり、本来は漢文と同じ中国語であるはずの現代中国語こそが訓読殺しの急先鋒だからだ。語順を転倒させる返り点を邪道とし、中国語に存在するはずもない活用語尾やら助詞やらを付ける送り仮名を拒否して、あくまで原文の古典中国語の語順のままに現代中国語で読み下してゆく直読派が、訓読の非を鳴らしているのである。まずは直読派の批判に対して反論を試みる必要がある。

直読派が訓読を批判する理由はいろいろあるが、私の見るところ、おおよそ次の三点に要約できるのではないかと思う。

- a 訓読は、原文の意味を正確に反映していないことがある。すなわち、訓読は欠陥を免れぬ翻訳法だ。
- b 古典たる『万葉集』などを現代日本語で読むのと同じく、古典たる漢文も現代中国語で読むのが当然だ。
- c 現代語を学んでから古典語を学ぶのが、外国語学習の常道だ。現代語を知らずして、いきなり古典語を学ぼうとする訓読は、外国語学習として邪道である。

以下、一つずつ検討を加えていこう。まずaであるが、これについては贅言を要すまい。本誌に連載した拙稿で繰り返し強調してきたとおり、少なくとも現行の訓読は、翻訳法ではなく、記憶術と理解するのが合理的だからだ。翻訳法でない訓読を、翻訳法として欠陥ありと非難してみても、見当違いなのである。先に述べたごとく、実用的には翻訳としての有効性を否定するわけではなく、理論的には記憶術と捉えるのが正しいはずだと主張しているのである。

次にbであるが、これは一見いかにも自然な論法だけに、なかなか説得力がある。現に直読派の人々はこの論法を金科玉条としているらしく、かつて出逢った直読派の人も、「たしかに現代中国語は、古典中国語とは発音が違う。けれども、現代の日本人が『万葉集』を読むときも、古代の奈良方言で読むわけではない。古典中国語たる漢文を現代中国語で読むのも、それと同じ理屈だ」と言っていた。しかし、よくよく考えてみると、このbの論法には疑念がつきまとう。試みに主語を補ってみよう。甲「日本人が古典たる『万葉集』などを現代日本語で読むのと同じく、中国人が古典たる漢文を現代中国語で読むのは当然だ」というので

あれば、これは立派な対比として成り立つ。現代日本人と日本古典との距離と、現代中国人と中国古典との距離は、具体的にはともかく、抽象的には同一と見なせるからだ。しかし、我々がbの文章を読めば、こうは受け取るまい。文章の後半にある助詞「も」が遺憾なく威力を発揮し、乙「日本人は、古典たる『万葉集』などを現代日本語で読むのと同じく、古典たる漢文も現代中国語で読むのが当然だ」と理解するだろう。bを主張する人々も、この意味で言っているはずだ。ところが、甲と乙をつらつら見比べてみれば、乙がいささか強引な論法だとわかるだろう。現代日本人と日本古典との距離と、現代日本人と中国古典との距離は、具体的にも抽象的にも、とても同一とは見なせないからだ。同一と見なせるのは、現代日本人と現代中国人が等価になったときだけである。そのためにも、現代日本人でありながら、現代中国人とまったく同等の中国語力を有する人物を想定しなければならぬ。だが、実際には、そんな人物などいるはずもない。むろん、枉がりなりにも中国語をしゃべってみれば、中国人は「おじょうずですね。中国人と変わりません」とほめてくれる。しかし、これが一種のお世辞であることは言うまでもない。ふつうの会話をしているかぎり中国人とまったく見分けがつかないほど中国語を流暢に話す日本人がいることはたしかである。けれども、幼いころから習い覚えた母国語と、懸命に努力したすえに身に着けた外国語とのあいだには、どこかに決して埋まらない溝がある。少なくとも、外国語に対しては、そのような畏れを抱いていなければならぬ。それを自覚しないとすれば、傲慢としか言いようがないだろう。

しかも、たとえ本当に中国人とまったく同等の中国語能力を持つ日本人がいたとしても、bの論法を正当化することはできない。なぜなら、その場合でも、「読む」とは発音するというにすぎず、読んで理解

することとは別物だからだ。もし中国人が現代中国語で発音したとたん、なんら苦もなく中国古典を理解できるのであれば、なぜ古代からあれだけ膨大な訓読注釈が作成され、現今に至っても現代中国語による古典作品の翻訳が次々に出版されているのか、とうてい説明がつくまい。中国の大学で古典文学を講じる教授たちも、とうに失業の憂き目に遭っているはずだ。つまり、bに見える「読む」とは、取りあえずは発音手段を意味しているのであり、必ずしも解釈手段を意味しているわけではないのである。

誤解のないよう断っておくが、漢文を現代中国語で発音しても無駄だと決めつけるつもりは毛頭ない。一字一音の中国語がかもしだす律動感はどうてい訓読では味わえず、現代中国語の語感によってこそ始めて語気が明確になる語句や表現も少なくない。訓読派の一部の人々が「現代中国語で漢文を発音しても、お経を棒読みしているのと同じで、まったく意味がない」と言っているのは、あられもない嘘である。しかし、それと同様に、直読派の一部の人々が「訓読では古典中国語の正しい意味がわからない」と言うのも、やはり嘘なのである。事実、直読派の人々とて、中国古典を解釈するさい、訓読をほどこした書物をも参考にするのが通例ではないか。御芳名を明かすのははばかられるが、さる雑誌の対談で「訓読に対しては厳しい態度を取らざるを得ない」との意見を表明している中国文学研究者の某氏も、あるとき酒席で実際のところを伺ってみると、「現代中国語の語感で理解できる文字は、語順のまま読むだけで、ことさら返り点など打って訓読することはない。けれども、難所におつかったときは、訓読したらどうなるかと考えてみる」と言っていた。やはり、訓読が解釈手段として有効なことは、紛う方なき事実なのである。

要するに、我々日本人には、漢文の発音手段として訓読と現代中国語の二種があり、解釈手段としても訓読と現代中国語の二種が存在するのである。好むと好まざるとにかかわらず、これは歴史のゆきかがりもたらした厳然たる事実だ。いづれを採って漢文に臨むかは、個人の裁量にゆだねるしかあるまい。当然、現代中国語で発音し、訓読で解釈することもありうる。現代中国語と訓読の双方で発音し、さらに双方を通じて正確な解釈を期する場合もあるだろう。訓読と直読は、補完の関係にこそあれ、決して矛盾するものではないのだ。要は、結果として正しい解釈がなされればよいわけである。

ではcはどうか。失礼ながら、これは俗耳に入りやすい妄説にすぎないというのが率直な感想である。たしかに、英語やフランス語にかぎらず、ほとんどすべての外国語学習が現代語から古典語へと向かう。これは常道というよりも、実情と呼ぶべきであろう。けれども、それとは逆の実情が存在することも忘れてはなるまい。ラテン語やギリシア語を学ぶ場合、イタリア語・スペイン語やフランス語を学んでからラテン語を学習するとはかぎらず、現代ギリシア語を修めてから古典ギリシア語を学習するともかぎるまい。なにしろ、単にギリシア語と言えば、古典ギリシア語を意味するのが日本語の実態だ。つまりcは、ラテン語・ギリシア語などの古典語の学習などまったく念頭にない一般の人向けの言辭にすぎない。「俗耳に入りやすい」と難ずるのは、この意味においてである。また、たとえ英語・フランス語・ドイツ語などだけを論議の対象としても、cは成り立つまいと思う。なぜなら、我々が英語やフランス語を学ばさい、取りあえず現代語から始めるのは、そうするより致し方ないからではないのか。まずは『ペオウルフ』、そして『コーサー』、さらにシェークスピアなどを学んでから現代英語を学習すれば、どれほど

現代英語に対する理解が深まることか。けれども、悲しいかな、日本語と遠く隔たった距離にある英語に対して、そのような芸当はほとんど望めないのである。ところが、古代から漢語を積極的に借用し、母国語のなかで消化してきた日本人にとって、古典中国語すなわち漢文は、英語などよりも、はるかに近い距離にある。我々日本人には、中国語についてだけは、古典語から現代語へと一種の理想的な学習の方途が開かれていなのだ。この理想とも称すべき可能性を邪道と切り捨て、已むを得ぬ仕儀にすぎない現代語から古典語への方向を常道とするとは、いかなる料簡か。この意味において、「妄説にすぎない」と難ずるのである。

以上、まずは訓読に対する直読派の批判について検討を試みた。節を改めて本題にもどり、現代中国語学習と訓読との関連を考えてみよう。

七

現代中国語の学習にとって、漢文訓読が一つの障害になり得ることはたしかだ。「我愛他」は、語順のままに〈I love him〉と発音し、「私はあの人を愛する」と訳してこそ現代中国語の学習なのである。いきなりレ点を打ち、「我 他を愛す」と訓読して事足りりでは、何を勉強しているのかわからなくなってしまう。「我聽說這箇人非常喜歡看电影」を「我 聽說く 這箇の人 非常に電影を見るを喜歡すと」などと読むに至っては、白話訓読の練習も同然で、とうてい現代中国語の学習とは呼べない。発音手段として訓読を用いることは、現代中国語学習の場においては御法度である。

もっとも、現代中国語の訓練を妨げるのは、独り訓読のみではない。そもそも日本人が持っている漢字・漢語の知識すべてが障害となりうる

のである。「參觀」「自殺」などとあれば、中国語を学んでいる場だとわかきまえつつも、日本人であるかぎり、つい「サンカン」「ジサツ」という発音が念頭に浮かんでしまう。「親友」とくれば、ろくに辞書も引かずに「親しい友人」の意だと決めつけてしまい、実は「親戚と友人」の意味だと知って、大いに驚くだろう。少しでも気がゆるめば、「汽車」は「キシャ」としか思えず（実は「自動車」の意）、「走」は「はしる」と訳してのほほんとしてしまう（実は「あるく」意）。要するに、現代中国語の学習においては、同じ漢字・漢語でも、日本語ではなく、中国語なのだという意識を高めることを肝要であり、そのためには、取りあえず漢字・漢語に関する日本語の発音・意味は邪魔物でしかなく、ましてや語順の転倒さえ辞さぬ訓読なぞ言語道断ということになる。実際、「也」が出てくるたびに訓読よろしく「なり」とやられたのでは（実は「しもまた」の意）、現代中国語の授業が成り立たなくなってしまうだろう。

しかし、それにもかかわらず、私見によれば、やはり訓読の知識が現代中国語を読むさいにも役立つはずだと考える。それは、現代中国語の文章のなかに古色を帯びた表現、すなわち往時の古典中国語＝漢文の表現が持ち込まれている場合である。ここでは、微妙な説明を要する副詞や相関語句に関する話は省き、わかりやすい古典の引用と四字成語に話を絞ってみよう。

あるとき現代中国語の文章に、「孔子曰（食不厭精、膾不厭細）」という一文が引用されていた。言わずと知れた『論語』郷党の一節で、例によって、中国人がいかにか古代から食べ物にうるさかったかを示すために取り上げられた文である。ふつう、このような古典からの引用は、訓読を訳文として呈示するのが定石であろう。なにしろ『論語』の名高い一

節だ。ところが、学生たちはこの孔子の言葉をまったく知らず、私がレ点を打っても訓読しようとするしない。しかたがないので、「孔子曰く（食は精を厭はず、膾は細きを厭はず）」と訓読してみせたが、それでも反応が今一つである。そこで聞けば、なんと「厭はず」という日本語の意味がわからないという。これでは反応が悪いのも当然だ。漢文訓読の勉強さえしていれば、レ点を打った時点で、一応はもっともらしい訓読ができたであろう。「厭はず」という日本語も、どこかで聞いたことがあるはずだろう。しかし、実際は右に記したとおりである。各字の下に添えられたローマ字発音記号にしたがって発音はしてみるものの、何の意味やら見当さえつかないのだ。

また、あるとき、やはり現代中国語の文章に、「顧客盈門」という四字成語が出てきた。訳読を担当した学生は、きちんと中国語で発音し、意味も「客がいっぱい押し寄せて、商売が繁盛すること」だとわかっている。けれども、なぜ「顧客盈門」がそのような意味になるのかたずねてみると、「顧客／門」の三字は理解できるが、「盈」の字義がわからないという。つまり、辞書に出ていた「顧客盈門」の釈義を写してきただけで、それぞれの字がどのように組み合わせられて「商売繁盛」の意味になるのか、まったく考えていないのである。訓読の習慣さえ身につけていれば、ただちに「盈」が気になり、ちょっと調べてレ点を打ち、「顧客 門に盈つ」と訓読してみることができたはずなのだ。

同じことが、「束之高閣」についても当てはまる。この四字成語が文章に登場したとき、学生は「放置する／ほったらかす」意だと答えるのみで、なぜそのような意味になるのか、少しも気にかけていなかった。これとて、一二点を打って「之を高閣に束ぬ」と訓読できれば、それまでの話である。訓読の威力、想いを致すべし。

現代日本語の文章に、古典が引用されたり、いささか古めかしい表現が用いられたりするのと同様、現代中国語の文章にも、古典が引用されることもあれば、古典的な字遣いや言い回しやらが姿を現すこともある。こうした表現は、いわゆる漢文に由来するものばかりで、その解釈には訓読が遺憾なく有効性を発揮する。もちろん、発音手段として、のっけから訓読を用いるのは困り物である。しかし、解釈手段として訓読を用いることは、なんら恥じる必要のない行為であり、それだけ古典中国語との関連にも目が向くようになるはずだ。現代中国語の学習にさいしても、訓読の知識は不可欠なのである。

八

さて、以上、現代における漢文訓読の存在意義を三つに分けて述べてみた。もっとも、第一の漢文の解釈手段としての有効性は、一に漢文のみかかわる意義にすぎない。また、第三の現代中国語学習における重要性も、現代中国語のなかに入り込んだ漢文の解釈手段としての有効性を主張するものであるから、やはりもっぱら漢文にかかわる意義であり、現代中国語学習という場が新たな条件として加わっただけである。そして、漢文の解釈も現代中国語の学習も、一般の人々から見れば、依然として特殊な状況ではあるまい。これを以て現代における漢文訓読の意義に普遍性を持たせるのは、いささか苦しいかと思われる。

ただし、第二の意義すなわち訓読表現の重要性だけは、日本語に対する普遍的な意義を主張し得るだろう。少し注意してみれば、現代日本語には訓読表現が少なからず生き残っており、英語の翻訳においても訓読表現が密かに利用されている。とりわけ強調しておきたいのは、訓読表

現を知らずして明治時代の日本人が綴った文章を正確に読むのは不可能だ、という事実である。わずか約一百年前の母国語の文章の読解が心もとないとは、なんとも情けない話ではないか。いったん途切れた文化伝統は、容易には回復できない。漢文訓読なぞ過去の遺物だと捨てて顧みない現今の日本の浅薄な風潮は、いずれ文化上の知的な怠慢として歴史に記録されることになるだろう。

なお、本誌に連載してきた拙稿において、訓読を記憶術と呼び、暗記術・暗誦法などとは呼ばなかった点について一言しておきたいと思う。これは、日本にも漢文訓読という大いなる記憶術が存在した、いや、存在していることを示し、以て訓読をフランセス・A・イエイツが『記憶術』で描いてみせたような西洋流の記憶術と同じ次元に上せたいと考えているからである。たとえば、イエズス会宣教師マッテオ・リッチは、位置付け記憶法という型の記憶術を用いて、でたために並べられた多数の漢字を先頭からも末尾からも自由自在に暗誦してみせたという⁽²⁵⁾。もちろん、真剣に漢文の学習に取り組み、原文を記憶するのが目的である日本の先人たちに、このような離れ業を演じてみせる必要はなかった。しかし、その訓読を通じて記憶していた原文の文字数は、決してリッチに優るとも劣らぬものであったかと推測する。李商隱の詩を付け焼き刃で暗記した私でさえ、三週間で二十首、すなわち最も短い五言絶句（全二〇字）で換算しても四〇〇〇字の原文を記憶できたのだ。学問と言えば漢文と決まっていた先学たちの記憶量は、予想をはるかに超える膨大なものであったことだろう。

記憶術としての漢文訓読——漢文に相對して訓読に及ぶ機会あらば、ぜひこの一語を念頭に思い浮かべていただきたいと思う。

注

- (1) この『詩経』周南「閔雎」の文選読みは、日尾荆山『訓点復古』巻上/二aから採った。ただし、読みやすさを重んじて、適宜に平仮名と片仮名を交え、また「彼洲」の「彼」を「河」に改め、「マレ人」の「人」および末尾の「也」は平仮名で記した。
- (2) 「音訓複読」という呼称は、山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(宝文館出版、昭和十五年/訂正版)昭和三十三年)四八九頁および『国語学大辞典』(東京堂出版、昭和五十五年)八八二頁「文選読み」項(執筆中田祝夫)に見える。ただし、太宰春台は『倭読要領』(中)四三三bで「音訓両読」と呼び、近藤春雄『漢文学大辞典』(明治書院、昭和六十年)も「音訓両読」で立項している。
- (3) 尚学図書「編集」『故事俗信 ことわざ大辞典』(小学館、昭和五十七年)一五一頁「馬から落ちて落馬する」項。
- (4) 同右『ことわざ大辞典』二八七、一一七〇頁。
- (5) 同注(3)。
- (6) 原田種成『私の漢文講義』(大修館書店、平成七年)二二頁。その他、訓読を翻訳だとする書物は枚挙に遑がない。
- (7) 注(2)所掲『国語学大辞典』「文選読み」項。
- (8) この文選読みの諸例は、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会、昭和三十八年)二六三、二六五、二七四、二七九頁による。同氏の執筆による『漢字百科大事典』(明治書院、平成八年)八三頁「文選読み」項および注(7)所掲項にも見える文選読みの代表例ばかりである。
- (9) 同右築島書二八三、二八七、二八八頁。「妙絶」は同右『漢字百科大事典』「文選読み」項にも見える。「東風」は『空齋』は『童蒙頌韻』(一一〇九)の例、「妙絶」は『遊仙窟』醍醐寺本(一三四四)などの例である。
- (10) 同注(7)。
- (11) 本誌第五号(平成九年三月)所収拙稿「漢文訓読の〈割引率〉」六五頁下〜六七頁上。
- (12) 太宰春台『倭読要領』(中)四三三b。
- (13) 日尾荆山『訓点復古』巻上/二a、巻下/三七b。
- (14) 注(12)同書(中)四二a、b。
- (15) 注(13)同書、巻下/三一b、三二a。
- (16) 注(8)所掲築島書二九〇、二九二頁。十七世紀後半に刊行された『文選』には、文選読みが保存されているが、十八世紀末から明治時代初期にかけて刊行された『文選』には、すでに文選読みが見られないという。
- (17) 当該の研究発表は、平成十年十月二十四日、日本比較文学会第三十六回東京大会(明星大学青梅校舎)の席上(発表題目「漢文訓読の正体」)に係る。
- (18) 林董「後は昔の記 他——林董回顧録」(由比正臣「校注」、平凡社『東洋文庫』、昭和四十五年)一三九頁(中村敬字の漢文暗誦)。
- (19) 『荷風全集』第四巻(岩波書店、昭和三十九年)一二五頁。
- (20) 拙稿「暗記できればまずはよし——〈漢文訓読〉記憶術」論の検証」一九五頁/星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・第一輯『普遍文明と民族文化——言語現象・造型表現・文明論の領域——』(編集責任者)小堀桂一郎、明星大学日本文化学部、平成十年)。
- (21) 注(6)所掲原田書二七頁。
- (22) 拙稿「使役か仮定か——福沢諭吉『文明論之概略』の仮定表現」/東大比較文学会「比較文学研究」第七三号(平成十一年二月)。
- (23) 拙稿「漢文訓読表現の陥穽——『米欧回覧実記』第四十一〜五十四巻を素材として」/明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・第二輯『表現——目的と手段——』(編集責任者)小堀桂一郎、明星大学日本文化学部、平成十一年)。
- (24) 久米邦武「編」『米欧回覧実記』第四巻(田中彰「校注」、岩波書店『岩波文庫』版(一)、昭和五十二年)九七頁。便宜上、片仮名を平仮名に改め、濁点を加えた。
- (25) フランセス・A・イエイツ『記憶術』(玉泉八州男「監訳」、水声社、平成五年)。
- (26) 平川祐弘『マッテオ・リッチ伝』1(平凡社『東洋文庫』、昭和四十四年)二二二頁下〜二三頁上。ジョン・サン・スペンス『マッテオ・リッチ 記憶の宮殿』(拙訳、平凡社、平成七年)二〇九〜二二二頁。

*本稿は、平成十年度明星大学特別研究助成費(特研B)による研究成果の一部である。